

「霊長類学・ワイルドライフサイエンス・リーディング大学院」による派遣研究者報告書

(当経費の支援を受けての出張後、必ずご提出ください)

平成 28 年 3 月 10 日	
所属部局・職	野生動物研究センター・修士課程学生
氏名	田島夏子

1. 派遣国・場所 (〇〇国、〇〇地域)
チリ共和国 (チロエ島・ラウカ国立公園)
2. 研究課題名 (〇〇の調査、および〇〇での実験)
ヤマビスカーチャおよびハラジロイルカ・ハラジロカマイルカ・イロワケイルカの生態・行動観察
3. 派遣期間 (本邦出発から帰国まで)
平成 28 年 1 月 28 日 ~ 平成 28 年 3 月 1 日 (34 日間)
4. 主な受入機関及び受入研究者 (〇〇大学〇〇研究所、〇〇博士/〇〇動物園、キュレーター、〇〇氏)
ラウカ国立公園 CONAF(ア리카・イ・パリナコタ)職員 Jose Luis Urrutia
5. 所期の目的の遂行状況及び成果 (研究内容、調査等実施の状況とその成果：長さ自由)
写真(必ず1枚以上挿入すること。広報資料のため公開可のもの)の説明は、個々の写真の直下に入れること。別途、英語の報告書を作成すること。これは簡約版で短くてけっこうです。

本出張は、南アメリカ大陸チリ共和国周辺海域に生息する野生イルカ類を観察し、その生態と行動についての理解を深めること、及び WRC 修士 1 年の一山琴世さんの研究である、ヤマビスカーチャの生態・行動観察の補助を行うこと目的とした。

首都サンチャゴでは、チリ国立動物園・チリ国立自然史博物館・Buin 動物園を見学し、南北に大きく広がるチリの植生・生態系の変化と、そこの生息する野生動物について理解を深めた。

まず首都サンティアゴにて、現地の動物園、博物館の見学を行った。

チリ国立動物園では、チリ国内に生息する動物種が多く展示されていた。特にチリ固有種であるラクダ科のビクーニャ、グアナコ、ダチョウの仲間のニヤンドウ、ビスカッチャ、オタリアを初めて観察することができた。また、日曜日であったせいか、地元の家族連れでにぎわっており、チリの人々と動物園との距離の近さを感じることができた。



オタリア



グアナコ

チリ国立自然史博物館では、北は砂漠から南は南極付近まで、チリのそれぞれの地域の植生・生態系を学習することができた。展示は全てスペイン語で説明されており、読んで理解することは困難であったが、それぞれの地域に生活する人々の生活様式や、生息する動物がジオラマで再現されていたため、視覚的にわかりやすく工夫されていた。企画展として、鯨類に関する展示も行われており、チリで観察される鯨類の生態についてや、チリの捕鯨の歴史などを学ぶことができ、非常に有意義な見学となった。

「霊長類学・ワイルドライフサイエンス・リーディング大学院」による派遣研究者報告書

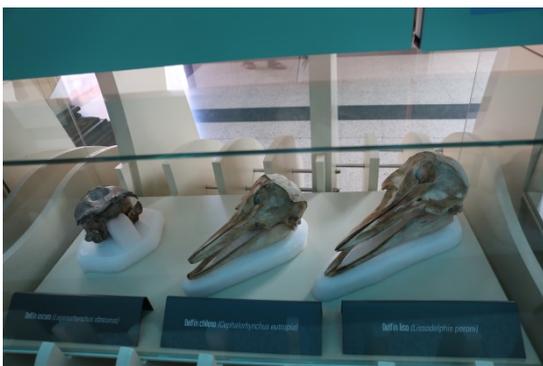
(当経費の支援を受けての出張後、必ずご提出ください)



チリ国立自然史博物館



ジオラマの展示



Cetaceans の企画展



Cetaceans の企画展

Buin 動物園は、サンチャゴ市内からバスで1時間ほどの郊外にある広大な動物園であった。ここでもチリに生息する動物種を多く観察する事ができたほか、アフリカ、アジアの動物、鳥類、昆虫、魚類など様々な生物種が展示されていた。展示は、それぞれの動物種の展示スペースがかなり広く、ほとんどが屋外放飼場であり、それぞれの種の生息域に似た環境を作っていたり、説明も生態からレッドリストのランクまで細かくわかりやすく解説されており、とても工夫が感じられた。陸生の動物の他、小さな水族館も併設されていたが、展示はとても質素で、淡水魚から海水魚までの小さな水槽が並んでいるだけで、日本の水族館とは全く違ったものであった。市内からの交通手段の説明が不十分で、道行く人々に尋ねながらの行き帰りであったが、見学することができて満足であった。



Buin Zoo



チンチラ

「霊長類学・ワイルドライフサイエンス・リーディング大学院」による派遣研究者報告書

(当経費の支援を受けての出張後、必ずご提出ください)



レッドリストの説明



ニヤンドウ

サンチャゴで WRC 特定研究員の吉田弥生さんと合流後、まずは野生イルカの観察のために南下し、プエルトモンからバス・フェリーで計4時間ほどかけてチロエ島 Chullec に滞在した。ここでは海洋生物学者の Tarsicio antezana さんにお世話になった。観察は、丘から目視で行い、湾に入ってくるイルカを探した。湾にはサーモンの養殖場が多数設置され、養殖業者の船も多く行き来していた。滞在中の3日間、湾内にイルカが入れるようになる満潮前後の5時間ほど観察を行ったところ、1日目の満潮時にミナミカマイルカ又はハラジロカマイルカが3頭、3日目の満潮時にチリイロワケイルカが3頭観察された。チリ沿岸に生息するイルカ3種は、背びれの形によってカマイルカ2種かチリイロワケイルカは識別が可能だが、カマイルカ2種は陸からの目視では識別が困難であった。観察したどちらの種も遊泳速度が遅く、ランダムに湾内を泳いでいたため、餌を追っていたことが示唆される。また、目視調査と同時に干潮時に湾内を歩き、Acoustic タグを設置して音響調査も行った。今回は音声データを得られることができなかったが、目視で両種が湾を利用していることが確認されたため、今後音声データによってさらに詳細な行動状態や夜間の利用等が明らかになることが期待される。



観察場所



音響タグの設置作業



ミナミカマイルカ又はハラジロカマイルカ



チリイロワケイルカ

「霊長類学・ワイルドライフサイエンス・リーディング大学院」による派遣研究者報告書

(当経費の支援を受けての出張後、必ずご提出ください)

プエルトモンを発った後、北上してアリカにて一山さんの野生ヤマビスカッチャの調査許可に携わっていただいた森林局 CONAF(アリカ・イ・パリナコタ)職員 Jose Luis Urrutiaさんと合流し、ラウカ国立公園近くの標高 3500m の村プトレにて高度順化のため 2 日間滞在した。プトレでは、Joseさんと、標高 5200m まで車で登り、ヤレータという樹木の観察を行った。さすがに高山病にかかり頭痛や吐き気が辛かったが、野生のビクーニャ、ビスカッチャ、ツコツコというネズミを観察することができた。順化後は標高 4500m のラウカ国立公園内のパリナコタ村に入り、野生ヤマビスカッチャの音声・行動調査を行った。定点観察用に、2 台のカメラをビスカッチャがよく利用する岩山の前に置き、録画を行った。また、各個体の音声と行動をビデオカメラとレコーダーを用いて個体追跡サンプリングによって観察を行った。総観察時間数は、定点観察データが計 51 時間分、個体追跡データが計 78 時間分となった。調査終盤では、タラパカ大学の Pablo Valladares 教授にお手伝いいただき、捕獲用トラップを設置し、ワカモノ個体を一頭捕獲、マーキングすることができた。今後のデータ分析に期待したい。



採食中のビスカッチャ



捕獲、マーキング個体

6. その他 (特記事項など)

本渡航に際しては、CONAF(アリカ・イ・パリナコタ)職員の Jose Luis Urrutia さん、カリフォルニア州立大学の Tarsicio antezana 教授、タラパカ大学の Pablo Valladares 教授には調査申請から現地での調査、生活面に関する円滑な手配、配慮をしていただきました。心からお礼申し上げます。吉田弥生さんには、調査に関する技術や、知識を教えていただき、プエルトモン滞在中の生活において大変お世話になりました。ありがとうございました。サンティアゴでは、堤真さんに大変お世話になりました。深く感謝いたします。また、このような調査の機会を与えてくださった幸島司郎教授、PWS 支援室、松沢哲郎教授をはじめとする PWS プログラム関係者のみなさまに厚く御礼申し上げます。